

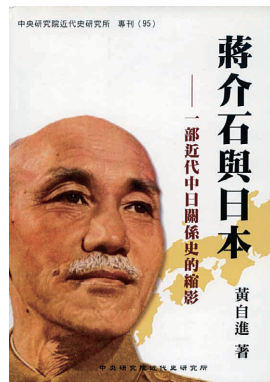
黄自進

『蒋介石と日本——近代中日關係史の縮図』

黄自進『蒋介石與日本——一部近代中日關係史的縮影』

台北・中央研究院近代史研究所、二〇一二年

徐 勇



「蒋介石研究」は国際化の特色をもった注目のテーマである。

二〇〇六年にスタンフォード大学で蒋介石日記が公開された後、関連する研究が高まっている。筆者が二〇一六年六月に「蒋介石研究」をインターネット検索したところ、学術系サイト「中国知网(CNKI)」で二二万件近く、一般系サイト「百度」^{バイドゥ}で二〇万件余がヒットした。さらに「蒋介石研究総述」で検索すると、「中国知网」では、研究論文、学術会議、研究団体などの内容紹介を含め、一万一千件余がヒットした。そのなかでも本書は、詳細な資料と踏み込んだ分析によって、蒋介石と日本の関係の代表的著書とされ、二〇一三年、台湾の中山学術著作賞を獲得した(以下、同書からの引用は頁数のみ示す)。

著者の研究は全方位的であるが、感情と主観的心理を中心的論点とし、蒋介石が日本に対して「特殊の情誼を抱いた」(五一頁)ことを強調し、「この百余年来、蒋介石は最も両国の親善を念とし、一意専心力行した政治的人物の代表であるといえる」(自序)とする。友好親善の例として、一九二七年の最後の訪日と田中義一首相との会見を、「日本の現職総理田中と面会することができたことを特別の榮譽であると自ら記し、その意義の重大さは贅言を要しない」(四九頁)と高く評価している。また戦後の「以德報怨(徳を以て怨みに報いる)」政策は、「決して中国に実質的損害をもたらしてはおらず、むしろ日本に大きな利益をもたらした」と指摘す

る(四〇一頁)。本書の結論では、「晩年の蔣介石は日本に対して特別の感情をもち、時に両国の相互扶助を望んでいたことが随所に見受けられる。この感情は政治の現実や利益の溝を乗り越えることはできなかつたが、心に深く植ええられた」(四〇二頁)と強調する。

感情心理によつて叙述する本書の大筋は明らかであるが、この問題について学界には多くの異なる研究がある。個別の事例として、戸部良一は、田中には別に政治目的があつたのであり、決して特別の榮譽ではなく、「日本トシテハ比較的温健ナル行動ヲ執レル蔣介石カ漸次堅固ナル基礎ノ下ニ共產派ヲ打破シテ勢力(ヲ得ヨカシト)」⁽¹⁾としたと指摘する。また家近亮子は、蔣介石の「田中首相との会談は最後の段階でようやく実現したが、その交渉は難航した」⁽²⁾と指摘し、蔣は失望し、ひいては全行程で「欺辱」、「憤慨」を感じたとする。⁽³⁾

蔣介石の総合的な評価については、中国の楊天石が、『找寻真实的蔣介石』などの著作で「蔣介石に対する認識は一辺倒であつてはならない」と指摘し、蔣は中華民族を熱愛し、侵略に反対した「民族主義者」であつたとしている。また台湾地域の呂芳上は、蔣介石の対日、および対米、英、インドなどとの隣国関係を考察し、蔣は「民族主義者」であり、「弾性国際主義者」でもあつたと評価する。⁽⁴⁾ 日本人研究者の山田辰雄は、蔣介石は救国の意志をもち、

その結果、思想、哲学においては「依然として日本人に対して優位を占め」、さらに日本の中国侵略によつて「屈辱感」をもち、ゆえに留学がもたらした「この論理は、蔣介石の日本に対する愛憎両面の感情の表現でもあつた」と指摘する。⁽⁵⁾ 以上のように、日本に対する蔣介石の感情心理のほかにも、さらに多面的な叙述、検討が必要であることがわかる。

日本にある青年蔣介石の史料に対する本書の把握とその分析研究は、傑出しているというべきである。しかし、一九二八年の全国統一の実現から一九四五年の日本投降の処理までの二十年余の執政生活における蔣介石と日本の関係については、多くの検討の点がある。

第一に、この時期の日本の侵略と蔣介石の対応は、一つの問題の両側面である。本書は一九〇七年の「国防方針」を日本側の代表的文書とし、さらに統計表によつてこれを補い、中国は日本の副次的な仮想敵国であつて、蔣介石は「日本政府が当初中国を侵犯する気がないことを認識した」(一五六頁)うえで、その対日、対内施政を展開したと指摘する。このように、一九〇七年の「国防方針」以前の日本の大陸政策の起源と展開、さらに近代日本軍およびその軍政体制の形成と変化の状況について、本書はあるべき説明を欠いている。

第二に、本書では「西安事変は本書の主題ではない」とし（二六七頁）、同時に一九三六年の中日双方、とくに日本の軍政上層部の分析が重視されなくなっている。本書では、少壮軍人の「桜会」の活動、三〇年代初期の軍人の政権奪取「クーデター」、「皇道派」と「統制派」の「激闘」は述べられているが、「二・二六事件」後の日本の体制変化や総合政策についての研究はほとんどされていない。本書附録の大事年表には、各年とも数十字前後の十分な記載があるが、一九三六年の段には「西安事変」と「五五憲草」の八字しかない。

一九三六年の蒋介石と日本の関係および一九三七年の中日全面戦争の勃発については、次のような鍵となる史実がある。「二・二六事件」後、軍部統制派は広田内閣を後押しして現役武官制を復活させ、軍部専制の典型的軍国主義体制を確立した。また「国策基準」を制定し、一九〇七年の「国防方針」・「用兵綱領」に対する第三次改定を行い、南北併進、全面中国侵略、世界大戦実行の戦略的大目標を確立した。華北駐屯軍を増強してこれを戦略的な強力軍隊とし、華北占領の軍事的準備を完成させた。さらにドイツとファシスト枢軸国の枠組みを確立したなどである。

本書はこの時期の広田外交と広田内閣の政策を友好的に評価し、広田が若いころ孫文に会ったことがあったため「かねがね中国革命運動に敬意をもち」、「広田の出現はおのずから空谷の聲音のよ

うに、世間の人に限りない期待を与えた」（二三六―二三七頁）などと指摘する。しかし、広田は戦後、極東国際軍事裁判所で起訴され、「廣田の在任期間を通じて、中国における軍事作戦は、内閣の全面的支持を受けた」ことが認められている。その犯罪行為の判決には、二つの平和に対する罪、一つの人道に対する罪が含まれ、死刑に処せられた。本書は一九三六年の広田内閣の軍政施策を総合的に述べてはおらず、むしろ友好的に叙述し、これによって蒋介石と日本の関係の論証にも偏りが生じている。

本書は上述の軍政体制の変化やその上層部の政策決定の内容を軽視し、関東軍など「現地」の軍人、あるいは中下級少壮派の作用を繰り返し指摘する。また蒋介石の綱領的文書「敵か！友か！——中日関係の検討」（一九三四年二月）の分析によって、「ともに満洲事変後の中日の膠着状態の解決をはかることが、蒋介石がこの論文を発表した主旨である」と指摘し、蔣は「満洲事変は関東軍の自作自演であって、決して日本政府の既定の政策ではない」とはつきりと認めたとする（一八七頁）。これに対し、蔣の原文は次のとおりである。

中国では当時、一部の人が、東北占領は日本軍閥の主張にすぎず、民間の進歩的輿論は必ず軍人の猖狂を抑えることができるかと考えていた。ゆえに当時の中国輿論はまだ民政、政

友両党の勢力の消長を紛々と忖度し、これを標準としていた。日本が通常の政党国家あるいは立憲国家ではなく、一種の特殊階級である軍閥が一切を握る特殊国家であったことがどうしてわかったのだろうか。この過ちは、のちに日本が国際連盟を脱退し、五一五事件によって犬養毅が白昼暗殺された後に完全に証明されたが、当時はきわめて流行していた。

ここで、蒋介石の日本の国家体制に対する認識と批判、その政局の突然の変化に対する予感はきわめて明白である。しかし本書では、蒋介石の大政局の分析を無視し、「関東軍の自作自演」など現地の判断のみをあげ、明らかに原文に対する誤読である。

第三に、日本が全面的な中国侵略戦争を發動し、中国が全面抗戦した原因に関して、本書ではまず、「一九三七年七月七日に勃発した盧溝橋事件は、日本政府の既定の計画ではなかった。事件の拡大は中日両国政府がともに妥協を望まなかったことと関係がある」（二五三頁）とし、またその結びでは、「盧溝橋事件は両国が苦心して構想した結果ではなかった」（三九六頁）と指摘する。

本書は「盧溝橋事件」がその夜の兵士の失踪と銃声を指すのか、それとも事件全体を含むのかを示していない。しかし前後の文を見ると、事件全体の発生と拡大を指している。盧溝橋事件のその勃発の原因には、これまでに次のいくつかの見解がある。第一に、

中国側の学界や日本の良心的な研究者は、日本の侵略計画によって引き起こされたとする。第二に、日本の右翼側は中国軍が最初の一発を打ち、戦争を挑発したと非難する。同様のものに秦郁彦が一九八七年に提起した「蒋介石の開戦決意」の分析がある。第三に、安井三吉らが論述するように、その夜の銃声事件は偶発的であったが、戦争の原因は日本の侵略拡張政策に根をはるとするものがある。そして第四に、中日双方とも大戦の計画や準備はなかったが、双方とも妥協を望まなかったことが戦争を招いたとするものである。本書はこの類型に属するようである。

日本が戦争計画を制定したことに關しては、近年の中日歴史共同研究報告書によって、一定程度、比較的統一した見解が得られ、前述の広田内閣時期における多くの日本側の計画文書が存在や華北駐屯軍の増強などの史実が認められた。それに対し、本書は一九三六年の日本の国策に対する分析が不十分であり、日本が無計画に中国に進攻したとする論述を示し、同時に中国の蒋介石政府が「妥協を望まなかった」ことも戦争拡大の原因であったと指摘する。このような論点は、一九八七年に右翼研究者秦郁彦が示した蒋介石の「開戦決意」が全面戦争を引き起こしたとする見解とほぼ同じである。

本書は「日ソ先戦」の態勢が蒋介石と日本の関係に与えた影響を繰り返して論証し、「対ソ作戦がすでに日本政府の既定の国策と

なつた以上、両側から攻撃されるのを避けるために、欧米および中国との関係をいかに改善するかが、自然と日本政府の対ソ作戦に付随する課題となつていった」（二五三頁）とする。しかし一九〇七年の「国防方針」から一九三六年の「国策の基準」までに定められた戦略の進攻性、作戦の要求によつて随時戦争相手を変え、「対数国作戦」原則、さらに「北南併進」方針を見落としている。二〇年代に国防方針の改定に参与した畑俊六は戦後の回想で「対数国作戦は、露支、米支、米英の場合を考案していた」と指摘している。日本の対ソ作戦では必ず中国問題を解決しなければならず、中国は日本の最も重要な征服の目標であり、ソ連およびそのほかの国に対する戦争の基地でもあつた。日本軍の仮想敵の重要性を検討する際に、順位のみを重要とみる一面性は避けなければならない。

スタンフォード大学の蒋介石日記が全面公開された際に、本書は冷静な見解にあふれ、蒋介石日記は「近代中国の歴史的事実の認識を覆すような衝撃は起こしていない」と指摘する（前言五頁）。現状を前にして研究を進めるには、まず研究のモデルを更新しなければならぬ。二〇世紀の黄仁宇は、ある人は蒋介石を「恣意的に批判し」、あるいは「きわめて恭しく蒋介石伝を著しており、読むと新たな「太祖本紀」「王朝を興した皇帝の事績を紀伝体で記し

たもの」を加えて「二十七史」としたかのようである」と指摘している。それに対し、本書の成功の点は、伝統的な政治史の枠組みを乗り越えて、人物の感情と主観的心理によつて叙述する方法をとつたことである。著者は学術の最前線に立ち、中日双方の、とくに日本にある蒋介石の青年時代の資料を有効に把握し、ついにしかるべき評価を獲得した。

しかし他方で、黄仁宇は決して「本紀」モデルの存在意義を否定してはおらず、少なくとも軍政の史実と感情や心理プロセスとのバランスの問題は残る。蒋介石の執政生活は半世紀余の長きにわたつており、必然的に「本紀」式の軍政領域の中心的事項を含んでいる。蒋介石の青年留学と執政生活を総合的に考察すれば、心理の日本「親善」であるよりも、事実の日本「通」であつた。伝統的な「本紀」式の軍政研究を取り入れ、軍人出身の「知日」政治家としての蒋介石の本来の姿をきちんと把握し、数十年の蒋介石と日本の関係を冷静に分析するなどの多くの検討の点をふまれば、統一の見解を得られる可能性がある。

（翻訳・小都晶子 立命館大学言語教育センター嘱託講師）

注

（1）戸部良一「日本軍人の蒋介石観——陸軍支那通を中心として」、山田辰雄・松重充浩編『蒋介石研究——政治・戦争・日本』（東方書店、

二〇一三年)、九五頁〔この部分は、一九二七年五月、樞密院における田中の発言(「樞密院會議筆記・附支那問題報告」一九二七年五月一八日、『樞密院會議文書』国立公文書館蔵、JACAR、RefA03033694100)の引用―訳者注〕。

- (2) 家近亮子「蒋介石の一九二七年秋の日本訪問——『蒋介石日記』と日本の新聞報道による分析」、山田辰雄・松重充浩編『蒋介石研究』、八四頁。
- (3) 同右、七八頁。
- (4) 呂芳上『「彈性」國際主義者蒋介石——一九四二年のインド訪問を検討事例として』、山田辰雄・松重充浩編『蒋介石研究』、四九九―五二五頁。
- (5) 山田辰雄「蒋介石・記憶のなかの日本留学」、山田辰雄・松重充浩編『蒋介石研究』、二一九頁。
- (6) 張効林訳『遠東國際軍事法庭判決書』(北京、群衆出版社、一九八六年)、五七六頁〔原著は、極東國際軍事裁判所編『東京裁判判決——極東國際軍事裁判所判決文』毎日新聞社、一九四九年、三〇〇頁〕。
- (7) 蔣中正「敵乎! 友乎! …中日關係的檢討」、何應欽『八年抗戰與台灣光復』(台北、黎明文化事業股份有限公司、一九六九年)、二〇七頁。
- (8) 防衛庁防衛研修所戦史室『大本營陸軍部(一)昭和十五年五月まで』(戦史叢書)(朝雲新聞社、一九七四年、初版一九六四年)、二四七頁。
- (9) 黄仁宇『從大歷史的角度說蒋介石日記』(北京・中国社会科学出版社、一九九八年)、七五、四頁。